エドマンド・ギブソン『ロンドン主教の二通の書簡』

青　柳　か お り*

【要　旨】　18世紀前半のロンドン主教エドマンド・ギブソンは，イギリス領アメリカ植民地のプランテーションにおけるアフリカ系奴隷の教育を推進しようと努めていた。彼の著書『ロンドン主教の二通の書簡』のうち最初の書簡は奴隷の主人に，二番目は宣教師に向けて書かれたものである。序文にはキリスト教徒への請願が収録されている。18世紀において，イングランド国教会はアメリカ植民地に宣教師を派遣して，異教徒，特にアフリカ系奴隷へ福音を伝道していたが，主に奴隷の主人の反対によってその任務は妨げられてきた。最初の書簡において，彼は主人たちに彼らのすべての奴隷の面倒を見ることはキリスト教徒の主人の義務であること，主日に奴隷の教育を許可してほしいことなどを訴えた。二番目の書簡では，彼は宣教師に対して，現地の聖職者に奴隷の教育に支援を与えるよう勧めてほしいと述べた。

【キーワード】　奴隷　教育　イギリス領アメリカ植民地　宣教師

請願

最近，我々の海外プランテーションに送られた次の二通の書簡の目的は，（1）そこでの主人と女主人に，彼らの黒人をキリスト教信仰において指導する義務があることを確信させること，（2）それに対してよくなされる反論に答えることであった。そして，（3）様々な教区内の牧師と教師に，彼らの職業の適切な務めが許す限り，この立派な仕事を支援するよう勧めることであった。

しかし，プランテーションにおける黒人は非常に人数が多く，教区は大変広大である。牧師と教師ができる最大限のことでさえも，この務めが必要とする十分な世話や要求には不足するであろう。非常に多くの主人と女主人は，少なくとも，効果的にその目的を達成するようなやり方で貧しい被造物のための指導を与えることができず，与えようとしていないことは経験からあまりに明らかである。どこであれ，このような事情があり，キリスト教国家において，彼らは真実の神を知らずに異教の偶像崇拝のもとで生活し死亡するのであるから，彼ら[主人と女主人][1)] が非難されるのは避けられない。

平成29年5月10日受理
＊あおやぎ・かおり　大分大学教育学部情報国際教育講座（西洋史）

これはキリストの福音が公言され公に説教が行われている国においては，非常に嘆かわしいことである。そして福音の約束を信じ，キリストの名誉と魂の救いについて本気で関心をよせているすべてのキリスト教徒は，福音の思想に著しく影響を受けているにちがいない。そのことはもちろん，我々の共通のキリスト教主義のための正義を行い，大変な非難からプロテスタントの名を救い出すために始められるどのような方法にも賛成し支持するように，彼を導くであろう。法王主義者[カトリック教徒の蔑称]に対して正義を行うために，海外プランテーションの住民と彼らが属するヨーロッパの様々な国の両方が，この問題に賞賛するに足る注意と関心を見せているので，黒人に教育を受けさせようという彼らの関心が，黒人に洗礼を受けさせようという彼らの熱意と等しいことが望まれる。そして，彼らに単にキリスト教徒の名前を与えることよりも，彼らをキリスト教信仰の真実の知識へ至らせることの方がはるかに強調されることが望まれる。

海外福音伝道協会はこの問題に非常に関心を持っている。最近，熟慮のもと，それは一致した見解を有することになった。つまり，ここから教理問答師を送る以上にこの務めを早く効果的に進歩させるものはないであろう。彼らの唯一の務めは，割り当てられた特定の地域の黒人を教育することであるべきである。そして，そのような種類の副業をしていない者は，教育にもっとも適切な時期と季節に仕事に没頭できるよう自由になるべきである。彼らの思考をすべてキリスト教に用いれば，臨時の講師がそうすると仮定するよりも，彼らはこの仕事の進行に関する適切な方法にはるかに良く習熟し，また，これらの方法をより正確に遂行するであろう。

しかし，現在の協会への寄付金は，プランテーションにおいて我々自身の人々[白人の国教徒]を維持する牧師のために使われ，使い果たされてしまっている。そこでは，もしも彼らの間に長く続く聖職者の任務のための支給がなされなければ，彼らは自分自身の費用を賄うことができず，異教やそれと同じような状態にすぐに陥ってしまうであろう。我々自身の間の敬虔で良い気質のキリスト教徒がこの問題を心にとめなければ，協会は黒人の教育のための教理問答士を維持できる状態にはなりえない。そして，彼らにその目的のために与えられた，その有益性のためにもっぱら割り当てられた寄付金によって，それ[黒人の教育]を続けさせることはできない。

この仕事を促進することや，その目的のために適切な方法で参加することの必要性と重要性とともに敬虔さが，読者について言及した次の書簡の中で明らかにされる。しかし，これが海外プランターの唯一の関心事にならないように，私はある意見を，そのようなすべてのキリスト教徒に，それが彼らの関心に値する仕事であると考えさせ，彼らの権力と能力に従ってさらに彼らに考えさせるような意見を加えるであろう。

一，最初に，地上におけるキリスト教教会は一つであり，それは同じ信仰において，そして，その頭であるキリストのもとで愛と一致の共通の絆において一緒に結ばれている。そのため，教会を支え拡大することは，キリスト教信仰の共通の主義であると当然考えられている。または別の言葉で言えば，世界中のキリスト教徒の一般的な関心なのである。そして，もし，それが世界中で宣教されるのを見たいと我々が望まないならば，それは我々が十分にキリストの名

誉について関心がなく，魂の計り知れない価値と福音の約束の偉大さに正しく気づいていないという確かなしるしなのである。

二，ここから次のように言えるであろう。我々自身の家族，親族関係，隣人，国家が我々の宗教への注意と関心において一番の場所に値するにもかかわらず，しかし，遠い場所というのは，それがどれほど遠くても，福音を伝道しようと努力することを免除するには十分ではないのである。そこには必要性があり，ふさわしい機会があると我々は知るであろう。そして，それは正しく我々の能力の中に存在している。逆に，我々がいつでも注意を寄せ援助を施している国からさらに離れれば，それだけ神の栄光と魂の救いに対する我々の熱意のより重要な証拠になるのである。

三，しかし，第三に，私が今弁護している人々［黒人奴隷］は我々の注意をより著しく集めている。なぜなら，彼らは本当に我々自身の国家の一部であり，我々と同じ政府のもとで生活しているからである。そして，さらに，彼らの労力によって，彼らは我々の政府およびこの王国の貿易と富の増加を支えることに貢献しているからである。次の書簡において，プランテーションの主人は，黒人の労働力によって彼らに与えられた大きな利益を思い出すであろう。それは，なぜ彼らの支出で黒人を教育すべきなのかという一つの論拠である。そして，同じ論拠が比例して，一般に彼らの労働力によって非常に利益を得ているこの国へと広がっている。これらの地域[イギリス領アメリカ植民地]で職業についたり，またはそこへの貿易によって裕福になってきた我々の間で，そのようなことがより著しく広がるに違いない。

四，一人の教理問答士がもたらす進歩は，それ[教育]が彼のすべての仕事である時に非常に偉大になる。それを維持するために貢献するすべての人は，彼が釣り合いのとれた人数の魂を改宗させ救うための神の道具であると考えることで，満足を得られる。この大地にまかれ神の恵みによって水を与えられた少しの種子は，非常に大きい増加をもたらすであろう。そして，天国で我々の幸福に対して決して少なくない付加物になるであろう。しかし，成功がどのようなものであっても，福音が伝道されるのを見たいという希望，そのような真実の宣言，そして，我々の奴隷の救いのためになされたそのような慈悲深い努力は，神の手から非常に豊かな報酬を確かに得られるであろう。

神よ，キリスト教徒の心が開かれますように。彼らの様々な能力に従って，神の名の栄光と何千という魂の永遠の幸福のためのこのすばらしい務めの遂行を，彼らが援助してくれますように。

書簡　一

黒人のキリスト教信仰における教育を奨励し促進するよう勧めるための，イングランドのプランテーションにおける家族の主人と女主人へのロンドン主教の書簡

海外プランテーションの宗教問題に関する責任はロンドン主教が負っている。これらの地域

の宗教状況について特別な問い合わせをすること，ほかのことについて聞くこと，いくつかの領土の中にどれくらいの数の奴隷がいるのか，彼らにキリスト教信仰について教育するためにどのような手段がとられているのか知ることは，私の義務だと考えている。奴隷の人数が桁外れに多いことを私はわかっている。キリスト教国家において，これらの貧しい被造物を彼らが育ってきた異教の暗黒と迷信から連れ出すこと，そして，彼らを福音の光とそれに属する恵みを分かち合う者にすることにおいて，どれほど少しの進歩しかみられないか認めることを，私は少なからず心配している。さらに嘆かわしいことであるが，その務めにおいて非常に少しの進歩しかみられないだけでなく，多くの人によって勤勉になされたそのためのすべての試みが，以下のことによって邪魔され妨げられてきたのであった。つまり，部分的には実際より務めの困難さを誇張すること，また部分的には，洗礼は黒人の状態を彼らの主人にとっての損失と不利益にするという誤った提案によって，妨げられてきたのである。

一，困難については次のように弁護されるであろう。ここへ来るまでに黒人は成人になっており，彼ら自身の国の異教の儀式と偶像崇拝に慣れている。彼らはほかのすべての宗教，特に異教徒の習慣となっている放蕩を禁止しているキリスト教に対して偏見を持っている。しかし，これが黒人の改宗のための試みに反する適切な理由であるならば，福音は現在のものよりもさらに伝道されることは決してないであろう。そして，異教徒の改宗のための努力はどのような時代にも，どの国でもなされないであろう。なぜなら，すべての異教徒は異教の儀式と偶像崇拝に，キリスト教宗教が禁止している不道徳でみだらな生活に慣れているからである。しかし，神に感謝しよう。すべての時代に，ほとんどすべての国で，敬虔で善良な人々の熱意と勤勉さによって，異教徒が改宗しキリスト教が伝道されてきた。しかも，これは奇跡の助けなしで行われたのである。もしも現在の時代が，改宗のための適切な手段を追及することにおいて熱意があり勤勉であるならば，神の助けを得て，すべての時代と同様になることを我々は疑う理由はない。

しかし，さらなる困難は，彼らは我々の言語をまったく知らず，我々も彼らの言語を知らないことである。言語の恵みがなければ，キリスト教宗教の教義を彼らに教える手段がなくなってしまう。それが続く限り，それが及ぶ限り，これは本当の困難であると私は認めている。しかし，もしも私に正しく通知されていたならば，ここへ来た時に成人だった黒人の多くが，我々の言語を非常にマスターしたために，日常生活の用事に関しては理解でき，理解されうるほどになったのである。そして，我々の宗教の教義の知識を彼らに教える敬虔な観点で，我々の言語の知識を彼らにもたらす適切な方法と努力がなされたら，ひとりでに遠くまで行ける彼らは，疑いなくさらに遠くまで行けるであろう。少なくとも，その中で残りの者よりも有能で真剣な何人かは，容易に我々の言語と我々の宗教の指導を受けて，彼ら自身の言語で残りの者を指導できるようになるであろう。その務めのための心からの誠実な熱意があるところではどこでも，これは非常に容易にできるであろうと期待される。

ここへ連れて来られるより前に成人した者たちを教育するのにどのような困難があっても，彼らの子供の場合は同じような困難はないのである。彼らは我々のプランテーションで生まれ育ち，異教の儀式や迷信に決して慣れていない。そして，ほかのすべての子供のようにどのよ

うな言語でも，特に我々の言語を容易に訓練できる。もしも彼らを良いキリスト教徒にすることが，彼らのおかげで財産を持つ者たちの，そして彼らを支配する政府の心からの希望と意思であるならば困難はないのである。

しかし，困難は私が想像するよりもはるかに大きいと考えられるが，それはどのような成功の望みもないほど，その務めを不可能にするようなものではない。しかし，善を行うことがまさしく不可能であれば，福音の伝道と魂の救済が直ちに関係するところで，我々がすべての手段と努力を止めて回避することが正当化されてしまう。多くの事業は，特にそれらに取り組む良い人がいないところでは，それらが経験の中にあると後で分かる時よりも，試みる前は実行不可能に見える。小さい始まりが決意とともに実行された時，偉大で驚くべき成功を伴うことはしばしば見られる。しかし，良い人が魂の計り知れない価値を正しく意識して，神と宗教の主義において従事する時ほど，より偉大で驚くべき成功をおさめる場合はない。十分に根拠のある確信のもと，宗教を促進する彼らの正直な計画と努力は，神からの特別な恵みによって支えられるであろう。

キリスト教徒の主人が，彼の黒人がキリスト教信仰のもとでの教育を受けるのを故意に妨げているとはほとんど思っていないことを考えるのは，私は気が進まない。または，同じことであるが，彼がその問題に関してまじめな分別のある考慮のもと，最後には教育の手段と機会を彼らに与えないと決心することを考えるのも，気が進まないことである。彼がこの問題を真剣に熟慮した後に，奴隷に主日に労働させることができるとは信じられない。また，生活に便利な設備を彼らに与えるために，その日，彼が彼ら[奴隷]を労働が必要な状態にさせることもできないであろう。なぜなら我々の宗教は我々に大変明白に，神は七日のうちの一日を，人間だけではなくて家畜のためにも安息日とされたことを教えているからである。神によって肉体の回復のみならず魂の改善のために定められたのが，その日なのである。そして，主人の支配のもとにあるすべての人々の面倒をみること，この聖なる日を守り，我々の主であり主人である神が意図された敬虔で賢明な目的のためにそれを使うことは，主人に課された義務である。（その日，またはより余暇のある別の日に）主人から彼の黒人の教育を指導し援助するよう望まれている宣教師が，最高の準備をしてそのような招待に喜んで応じないとは，私は考えない。そして，教区牧師としての彼の職務の必要な任務に適切に一致したすべての援助を与えないとは，ほとんど考えられない。

もし，黒人をキリスト教宗教において教育するために，彼らの毎日の労働と雇用から時間を取ることは出来ないと言われるなら，実際は以下のことが言えるであろう。神の福音の伝道を考慮することや人間の魂を救うことは，主人の世俗的利益を少しも減少させることはない。そして，神の栄光および人間の魂の救いのための彼らの熱意の公正な報酬として，海路と陸路による彼らの事業を賛美し繁栄させることによって，彼らが損害を受けるようなことを神は少しもお出来にならないし，なさらないであろう。この場合，聖パウロがそれと同じような立場にあったように，私は次のように推論する。もし彼らがあなたを，（彼らの知力と精神の，さらには彼らの子孫の）彼らの世俗的な事柄の分担者にするならば，あなたは彼らをあなたの宗教的な事柄の分担者にすべきである。彼らの労働によってあなたが受ける利益からいくらか減少す

るとしても，そうすべきである。彼らの労働から受け取る利益の大きさを考えると，以下のことが望まれる。すべてのキリスト教徒の主人，特に非常に多くの人数を所有している者が，これらの貧しい奴隷の教育を提供するために少しの出費をすべきである。そして，より少ない人数を所有するほかの人々や同じ地域に居住する者は，彼らに属している黒人のために，共通の教師の費用の支出に共に加わるべきである。海外福音伝道協会は，黒人の教育のためのそのような確立された規則的な準備の重要性と必要性を十分わかっている。そして，良いキリスト教徒がその目的のための時を得た貢献によってその仕事を援助できるように，黒人の教育が彼らの関心の中にあるようにと真剣に希望し祈っている。しかし，現在，彼ら[海外福音伝道協会]の基金は欠乏しており，貧しい定住者自身の負担では維持できない神の礼拝を実行するための，宣教師の多くの要求に応えることができないでいる。

二，しかし，以下のことがさらに申し立てられるであろう。キリスト教信仰における異教徒の教育は彼らの洗礼のためである。彼らの教育のために許される時間が彼らの労働の利益を減少させるだけではなく，彼らが教育を受けた時に彼らに洗礼を授けることは，主人が自身のお金で奴隷として彼らを購入した財産と，再び随意に彼らを売却する権利両方を破壊するであろう。そして，彼らをキリスト教徒にすることは彼らをますます勤勉ではなくしてしまい，より制御できなくしてしまうだけである。

これに対しては，以下のように非常に事実の通りに返答されるであろう。キリスト教と福音を奉ずることは　市民的所有権においても，市民的関係に属するどのような義務においても少しの変更も生じさせない。すべてのこれらの点において，人はキリスト教を知った時と同じ状態が続く。キリスト教が与える自由とは，罪とサタンの束縛からの自由，人間の欲望と激情，法外な要求の支配権からの自由である。彼らの外面的な状況に関しては，それが以前に何であっても，奴隷であっても自由人であっても，彼らが洗礼を受けてキリスト教徒になることは，それにどのような性質の変化も起こさないのである。聖パウロが我々に話したように，彼はまさにこの点を直接話している。コリントの信徒への手紙　一，第七章二〇節「おのおの召されたときの身分にとどまっていなさい。」二四節「兄弟たち，おのおの召されたときの身分のまま，神の前にとどまっていなさい。」キリスト教は，人々がキリスト教を知った時の身分や状態の彼らの義務から，人々を免除するどころか，かえって，人間の恐れからではなくて，神への義務の意識や未来の審判のための信仰と期待から，これらの義務を非常に勤勉に誠実に実行するための，より強い責務を彼らに与えるのである。つまり，キリスト教は人々をどのような点でも彼らの義務を守らないようにする傾向があるということは，それに値することはない程遠い非難である。そして，福音の教訓の全体の主旨によって論破される非難である。その教訓はすべての人々に，特にその多くが奴隷の状態であった者に，彼らの様々な身分に属した義務を忠実に勤勉に遂行することや，神への崇敬を熱心に説き聞かせる。それ[キリスト教への非難]はまた，我々の理性によって論破される。それ[キリスト教]は我々に恐怖の束縛よりも良心の束縛の方が，どれほどより強力で普遍的であるか教えてくれる。そして最後に，それは経験によって論破される。宗教の良識を持たない者と比較すると，それは本当に宗教的なこれらの奴隷の偉大な価値を教えてくれる。

洗礼後に，彼らが以前より統治できなくなることに関して。福音はどのような場所でも，良

心のために勤勉と忠実だけではなく服従も強いるのであり，必要な場所で服従を強制する適切な手段を主人から奪わないことは確かである。人間性は我々の同胞を残酷に野蛮に扱うことすべてを禁止している。また，人間性は我々に理性を与えられた生き物を獣のレベルで考えることを容認しない。キリスト教はどのような程度の厳しさと厳格さも，支配者の手から奪うことはない。それは支配と統治を保持するために必要であることは明らかである。人間とキリスト教両方の一般的な法律は，どの国であれ，どのような状態であれ，すべての人間に対する親切，やさしさ，憐みである。それゆえ，我々はこれらの立派な美徳および，我々の選択と希望を実践することができる。そして，必要な場合のみ厳しく厳格な方法に不本意に頼るのである。この必要性から，彼らが洗礼を受けた後でも以前と同様にあなた自身は裁判官でいられる。それゆえ，あなたはその変化によって苦しむ危険に陥ることはない。彼らにとって，もっとも厳しい主人が彼らに与える最大の苦難でも，異端の状態のままでいることの残酷さ，キリストの福音においてすべての人間に届く救いの手段が奪われることの残酷さとは比較にならない。本当に，統治を維持するためになぜ厳しさが必要なのかという一つの大きい理由は，統治されていない者たちの間に宗教が欠けていることである。彼らはそれゆえ，恐怖と恐ろしさだけからしか彼らの義務を果たさない。統治している者，統治されている者どちらにとっても，それより不安定な状態はありえない。

三，これらのことはあなたに大きな印象を与えるであろう。あなたが自分自身のことを，単なる主人ではなくて，キリスト教徒である主人として考えてくれるように懇願したい。キリスト教徒である主人は，サタンの力を打ちこわし，キリストの王国を拡大するために，あなたの状態があなたに許すできるだけすべてのことを，あなたの信仰告白によって行う義務がある。神があなたに与えた，それほど多くのサタンの支配圏のもとにまだ存続している異端の偶像崇拝者に対する影響力によって，あなたの手にはこの仕事を援助する大きな機会がある。次に，私はあなたに，彼らを単なる奴隷として，労働する家畜と同じレベルで考えないよう懇願したい。そうではなくて，あなたと同じ体格と能力を持ち，永遠に幸福になれる魂と，それのための教育を受ける理性と理解力を持つ男性奴隷と女性奴隷として考えてほしい。彼らが外国から来たとしても，異教の偶像崇拝者の間に居住していた時のように，彼らがキリスト教国家におけるキリスト教知識から程遠いとは言えないであろう。彼らがあなたがたの間で生まれ，キリスト教国家以外の空気を吸ったことが決してないならば，彼らが生まれてすぐ異教の偶像崇拝者の国へ移住したかのように，キリスト教に不慣れな者にはならないであろう。

これらのこと，および同じような考察によって，あなたがこの問題を深刻に受け止め，それほどすばらしい敬虔な仕事に対して，あなたの権力の面で最良の方法を用いるであろうと願っている。異教徒にキリスト教信仰を，つまりキリスト教徒の良い生活を奉じたいと思わせるために用いられうる，最良の動機の一つをあなたに提案し忘れることはできない。あなたとあなたの家族の真面目さ，節制，慈善の模範を，そしてほかのすべての美徳とキリスト教徒の生活の恩恵の模範を彼らに見せてあげなさい。あなたが自分自身とあなたに属するすべての者に，呪いとののしりを控えて主日を神聖に保ち，神の公的礼拝に出席し，キリストが彼の福音の中で命じた聖餐式に出席するように，どれほど厳しく義務を負わせているか彼らに注視させなさい。あなたの行動や会話の一般的な傾向によって，あなたの内面の性格と性質は福音が命じて

いるようなもの，つまり，穏やかでやさしく慈悲深いものであると彼らに気づかせなさい。これらの方法によって，あなたは彼らの心を教育へと開かせ，彼らに福音の真理を理解させるであろう。さらに，もしあなたが，彼らを正しく教育するための敬虔な努力と関心を加えれば，あなたは多くの魂を救う媒介者になるであろう。そして，現世におけるあなたのすべての仕事に対する神からの恵みを確かにするだけでなく，来世における際立った報酬をあなたは受け取るであろう。その報酬は，人間の救いを促進しキリストの王国を拡大するための努力に熱意を持っている，すべての人々に与えられるであろう。そして，最後の審判の日に大勢の中であなたが見いだされるということは，あなたの忠実な友人の偽りのない希望であり，真剣な願いである。

1727 年 5 月 19 日
ロンドン主教エドマンド

書簡　二

様々な教区でキリスト教信仰における黒人の教育へ援助を与えることを勧めるための，ロンドン主教からイングランドのプランテーションにおける宣教師への書簡

善良な兄弟の皆様

プランテーションからの多くの書簡によって，そして，そこからやって来た人々の説明によって，これまで黒人をキリスト教信仰へ改宗させる点で非常に少しの進歩しかみられないことを，私は理解している。そのため，敬虔で必要な仕事を促進し奨励するために，私は主人と女主人に彼らがそれのもとに置かれる義務を課すことは適切であると考えてきた。このことを私は彼らに向けた書簡において述べた。あなた自身の教区で黒人を所有している人々へ普及させるために，それの多くの写しをあなたは受け取るであろう。あなたが彼らの手にその書簡を渡した時に，あなたが用いるのが妥当だと考える主張によって計画を実施してくれることを懇願したい。そしてまた，その仕事を実行するためにあなた自身の援助があることを彼らに保証してほしい。

非常に広大な教区があるプランテーションにおいては，教区牧師の務めと労力が大きいに違いないと私は理解している。しかし，牧師のほかの任務からの余分の多くの空き時間をこれに費やすべきだと，私は自分自身を納得させている。そして，すべての宣教師が彼の教区で，人間の魂のための非常に慈悲深い仕事と，彼の宣教の偉大な目的と計画にかなう仕事をさらに促進させる準備が出来ていることは疑いえない。

自分自身の黒人を所有するこれらの牧師について，私は，彼らが黒人に洗礼を受けさせるためにキリスト教宗教において教育するよう最大の努力をすることは，彼らの絶対必要な義務であると思わざるをえない。なぜなら，そのような黒人は彼らの本当の直接の関心事だからであ

る。また，聖職者の家庭の中でそれが全く無視されたり，冷淡に実行されたりするならば，ほかの主人や女主人がその務めを長期にわたって続けると期待するのは無駄だからである。あなた自身の黒人の教育におけるあなたのどのような程度の軽視も，彼らからキリスト教の計り知れない恩恵を差し引くことになるだけでなく，ほかのすべての家庭におけるすべての計画を明らかに妨害し，くつがえすことになるであろう。

私はまた以下のことを希望している。仕事全体の中の一部はキリスト教主義において若者を教育することであるが，様々な教区における教師は彼らの余暇の時間を，特に彼らと黒人両方がもっとも自由である主日に喜んでそれのために費やすことにより，この仕事の遂行のためにいくらか貢献するであろう。そして聖職者は彼らの職務の公的な務めに関心を持つ。この敬虔な計画へ彼ら[聖職者]がもたらす援助は人間からの報酬を受けるべきではなく，彼らの援助は神の仕事であって，神によって報酬を与えられるであろうし，きっと確実に与えられるであろう。そして，彼らが人間から受け取る報酬のために彼らがこれを強いられているのでなければ，それだけ，神の手からの彼らの報酬はより大きくなるであろう。それゆえ私は私の名において，以下のことをあなたに懇願しなければならない。それ[教育]を彼ら[聖職者]に勧めるように，すべての適切な主張と説得によって彼らの配慮をそれに真剣に向けてくれるように，そして，彼らの余暇の時間に常に喜んで援助を申し出て与えてくれるようにと。

それゆえ，この重要な仕事を推進する際に，あなたが迅速に熱心に協力してくれることは疑いないので，このことと，あなたの司祭としてのほかの任務に対して神の恵みがありますように。

敬具

あなたの親愛なる友人，兄弟

1727 年 5 月 19 日

ロンドン主教エドマンド

解説

本翻訳は Edmund Gibson, *Two Letters of the Lord Bishop of London: The First, To the Masters and Mistresses of Families in the English Plantations Abroad; exhorting them to Encourage and Promote the Instruction of their Negroes in the Christian Faith. The Second, to the Missionaries there; directing them to distribute the said Letter, and exhorting them to give their Assistance towards the Instruction of the Negroes within their several Parishes. To both which is prefixed, An Address to Serious Christians among ourselves, to Assist the Society for Propagating the Gospel, in carrying on this Work,* (London, 1729)の全訳である。書名には以下のような非常に長い副題がついている。『ロンドン主教の二通の書簡 ― 一, 黒人のキリスト教信仰における教育を奨励し促進するよう勧めるための，イングランドの海外プランテーションにおける家族の主人と女主人への書簡。二，書

簡を配布するよう指示し，様々な教区内の黒人の教育へ援助を与えるよう勧めるための，そこでの宣教師への書簡。両方に以下の序文を付す。この務めを続けるため，福音伝道協会を支援してもらうための，我々自身の間の敬虔なキリスト教徒に対する請願－』

エドマンド・ギブソン（Edmund Gibson，1669-1748）は18世紀前半のロンドン主教で，当時の指導的な聖職者であった。彼はイギリス北西部ウェストモアランド，バンプトンに生まれ，1690年，オクスフォード大学クイーンズ・カレッジを卒業して著述活動を行っていたが，1695年に執事，1697年に司祭に叙任された。1715年，彼はリンカーン主教に就任し，1723年から死亡するまでロンドン主教を務めた。

17世紀初期からイギリスはアメリカ植民地を建設していたが，現地では会衆派等のピューリタン系教会が有力で，イングランド国教会は弱体であった。政府も植民地への関心が低く，海外に主教を派遣することはなかった。一方，フランスやスペインのカトリック教会は北米や南米に宣教師を派遣して布教を拡大し，信者を増やしていた。本国のイングランド国教会およびアメリカ植民地の少数派の国教徒は，カトリック教会に対抗するためにもっと積極的に布教すべきだと考えていたが，18世紀においても在住のアメリカ主教は存在せず，慣例にしたがってロンドン主教が海外の国教会を監督することになっていたのである。そのため，ギブソンはアメリカ植民地の国教会聖職者や宣教師の相談役でもあり，彼らと書簡のやりとりをしていた。彼はロンドン主教在任中にアメリカ植民地の宗教状況，アメリカ主教派遣計画，海外福音伝道協会(the Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts)の布教活動などに関心を持つようになった。海外福音伝道協会とは，1701年に国王ウィリアム三世の勅許状によって設立された，国教会の最初の布教団体である。とりわけ彼は黒人奴隷の教育の推進に熱心に取り組み，1727年，イギリス領アメリカ植民地のプランテーションで働く黒人奴隷の主人および宣教師に向けて，『ロンドン主教の二通の書簡』を執筆したのであった。1729年にこの著作は刊行され，イギリスのみならずアメリカ植民地でも大きな反響を呼んだ。

当時，一般的に黒人奴隷は人間とはみなされず，主人が購入した財産であった。主人は自分の利益を追求しており，奴隷をプランテーションでの単なる労働力として使っていた。黒人奴隷は野蛮で愚かで教育は不可能と考えられており，主人の多くは彼らの教育には関心がなく，さまざまな理由で反対していた。さらに，彼らは人間ではなく魂がないため，魂の救済も不可能と考える者もいた。しかし，そのような時代において，国教会の高位聖職者ギブソンは奴隷への教育や布教を強く主張したのである。18世紀終わりになると奴隷貿易廃止運動が起こり，様々な布教団体が増加するなど奴隷への教育や布教が盛んになっていくが，まだ18世紀初期の段階でそのような活動を訴えたこの著作は画期的であったといえよう。

第一の書簡はプランテーションの主人と女主人にあてたもので，まず彼らの問題点が書かれている。黒人奴隷への布教というキリスト教徒の務めが，主人の不利益になるといって妨害されているという。主人の妨害以外に，黒人が異教徒で偶像崇拝者であること，イギリス人と言語が異なることも布教がうまくいかない要因であるが，そのような困難を乗り越え務めを果たすことは不可能ではないと述べている。ギブソンは，主人が彼らの黒人奴隷にキリスト教教育を受けさせていないことを嘆いていた。当時，教育とはキリスト教教育を意味した。彼は週に一度，安息日は労働ではなく教育にあてるべきであり，教区牧師も喜んで参加すると述べている。また，主人が布教に反対した大きな理由は，奴隷が洗礼を受けると自由になり自分たちの財産が失われるのではないかと恐れていたことである。それに対して，ギブソンは洗礼後も奴

隷の身分は変わらず自由にはなれないと主張し，彼らを安心させようとした。むしろ，キリスト教徒になれば自分の身分に応じた義務を果たすようになるという。そして，主人たちに単なる主人ではなくキリスト教徒である主人となるように，奴隷は教育を受ける理性と理解力を持っていることをわかってくれるように懇願した。第二の書簡は宣教師にあてたもので，黒人奴隷のキリスト教教育に協力してくれるように依頼し，このような務めを果たせば神から報酬を与えられるとしている。また，彼は宣教師に対して，現地の聖職者に奴隷の教育に支援を与えるよう勧めてほしいと述べた。ギブソンをはじめ様々な聖職者が奴隷のための教育を訴えたが，主人たちの反発は強く 18 世紀を通して布教の困難が続いた。しかし，彼の著作は奴隷への布教，教育の推進において大きな役割を果たしたと思われる。

注

1）[　　]は翻訳者の補いである。

Edmund Gibson,　*Two Letters of the Lord Bishop of London*

AOYAGI，Kaori

Abstract

Edmund Gibson, the Bishop of London tried to promote the instruction of the African slaves in the Christian faith in English American plantation. In the eighteenth century, although the Church of England sent the missionaries to British America for propagating the Gospel to heathens, especially African slaves, there has been very little progress made in the work mainly because of the masters' opposition. In his first letter to the masters and mistress of families in the plantation, he exhorted them to encourage and promote the instruction of their Africans in the Christian faith. He suggested that it was a duty upon Christian masters to take care of all their slaves and to permit them to be instructed on the Lord's Day. In his second letter, he entreated the missionaries there to recommend the instruction and the conversion of the slaves to the clergy.

【Key words】　slaves,　instruction,　British America,　missionary